

文化 第81巻 第1・2号 一春・夏一 別刷  
平成29年9月25日発行

## 巢鴨とげぬき地蔵に集う高齢者たち

陳

甜

## 巣鴨とげぬき地蔵に集う高齢者たち

陳

甜

### はじめに

信心——都会生活の中で忘れられたようなこの言葉が、東京のまん中に生きている。毎月四の日、とげぬき地蔵の縁日に、JR 山手線巣鴨駅はたいへんな混雑ぶりをみせる。さらにとげぬき地蔵の大祭の日、すなわち1月24日、5月24日、9月24日になると、より一層賑わいをみせ、その大半はお年寄りたちである。彼らの行先は「とげぬき地蔵尊」で有名である高岩寺及びその地蔵通り商店街で、東京という最先端のものが集まる現代大都市では、少し珍しい風景と感じられる一方、いかに超高齢社会であるかという今日の社会状況も窺わせる。では、いったい巣鴨のいかなるものが人々を引きつけるのか、人々がいかなる目的をもってそこへ行くのか、そこでいかなる行為を行うのか。これらの問題を明らかにすることは、超高齢社会に置かれる高齢者たちが死を見つめながらもいかに生きていくかという問いに答えるための一つのヒントになるのではないかと考えられる。

### 1 巣鴨とげぬき地蔵

巣鴨は「おばあちゃん原宿」という名でも広く知られ、今ではすっかり高齢者の集う街として定着している。その地蔵通りは、大きく分けると、巣鴨地蔵通り商店街に加盟している商店と、縁日に出される露店、高岩寺（とげぬき地蔵）という三つの主体からなるものである。昔は菊人形発祥の地として知られ、菊見の季節には多数の来観者を集め、「植木の里」<sup>1</sup>として栄えていたが、今日はやはりとげぬき地蔵さまを目当てに来る参詣者が多い。

本来巣鴨地蔵通りの「お地蔵さん」といったら、とげぬき地蔵尊ではなく、

---

<sup>1</sup> 川添登『植木の里』（ドメス出版、1986）；同上編『おばあちゃん原宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』（平凡社、1989）を参照。

現在の地藏通りに入るところの左側に位置している江戸六地藏尊の一つである「眞性寺」のことであったといわれる。とげぬき地藏を指しているようになったのは明治 24 (1891) 年に高岩寺が現在地、巢鴨に移転した後のことである。その縁起については、大正 7 (1918) 年に発行された『北豊島郡誌』に、以下のよう記されている。

大字巢鴨二丁目に在り、元下谷区屏風坂下に在りしを明治 24 年今の地に移せり。此寺は曹洞宗永平寺末にして創立は慶長三年開祖は扶岳大助和尚なり、延命地藏尊を本尊とす、世俗とげ抜き地藏と稱し其の名都下に高し、毎月四の日を縁日とす、江戸砂子に載するところを左に。

印蔵地藏、萬頂山高岩寺、禪宗、下谷屏風坂下。

正徳三巳年田付氏何某の妻病苦萬死一生たる時云、わが長谷川の家に霊ありて女子 25 歳を越えず、われ今死を待つのみなり、田付氏之を聞き此上は、神明佛陀の力ならではと常に信ずる所の地藏尊を祈る、少睡る枕に一人の僧来りて曰く、此像一萬體を紙に寫し江河に流しなば平癒ならしめんと屑木の如きものを與へ給ふと見てさむる、枕の上に自然木一寸三分の地藏を刻める印像あり、告の如く一萬體寫し淺草川に浮めり、其夜病人の床に衰へたるおのこ立てるを高僧杖を以て追給ふ、と夢ならず現ならず覺えて明の日より全快におもむき死をのがれたりしなり、此像因縁ありて當寺に納まる、重症難病の者此印像をいただくにそのしるしあらずと云ふことなし、くはしきは當寺の靈驗記に見えたり云々。〔北豊島郡農会 1918 : 189 頁〕

また、「とげぬき地藏」の名の由来については、権田保之助による著された『娯楽業者の群』の「民間信仰」項目にある「とげ抜き地藏尊」の中、以下のような靈驗話が書かれている。

正徳 5 年乙未の年、江戸毛利邸につかうる女、折れたる針を口にくわえ、過り吞みて咽に刺ち抜けず、後には腹中に入りて甚だ痛み苦しむ。諸医手を拱き諸薬其効なし、即ち此靈驗あらたかなる地藏尊の御影一枚を水にて吞ましむ。暫くありて吐逆す。其中に御影あり、水にて流し見るに、四分ばかりの針の折片、御影を貫き出でたり、座中奇異の思いをなせしより、此の時より「とげぬき地藏尊」と申し奉る。何病にても御影を頂きて、治せざる事なく、如何なる願望も祈念して成就せざる事なし信ずべし頼むべし。〔権田 1974 : 167 頁〕

つまり、咽に刺さった「針」が抜けたことから、「とげ抜き」になったので

はないかと考えられる。この縁起話と名前の由来話は、現在高岩寺に保存されている田付又四郎が享保 13(1728) 年 7 月 17 日の日付で、自らしたためた『下谷高岩寺地藏尊縁起靈驗記』の中に記され、同寺発行の『高岩寺誌』(1986) の巻頭に、現代語訳でも載せられている。その『靈驗記』にはとげぬき地藏に関するご利益談が数多く記され<sup>2</sup>、身体「とげ」も心「とげ」も取り除いてくれるという靈驗あらたかなるご利益が信じられてきたからこそ、多くの参詣客に求められ、繁盛した門前市が形成されたのであろう。

## 2 高岩寺における信仰空間

高岩寺においては、本尊のとげぬき地藏のほかにも、境内左手に洗い観音、子育て地藏、小僧稲荷の三体が並んでおり、多くの参詣者を引きつけている。特に本堂に向かって左手前に立つ洗い観音は、参詣者からとげぬき地藏に劣らない人気を集めている。そこで、筆者は山門を通過して「香炉」、「洗い観音」、「小僧稲荷」、「子育て地藏」、「本堂」という 5 ヶ所に立ち寄る参詣者の数を確認し、図 2 のようにまとめた。

図 2 を見れば、やはり本尊のとげぬき地藏が最も多くの参詣者を集め、高岩寺の信仰空間において中心的な決め手となっているのがわかる。その次は香炉(写真 2)であるが、香炉というよりも、香炉に上る煙の方が参詣者にとって大きな役目を果たすのである。高岩寺の山門を通過して、すぐ正面に大きな香炉がある。そこに立ち寄る人はみんな煙を煽り、自分の身体に当てる。慣れたやり方でやっている参詣者もいれば、他の人を真似してやっている参詣者もいる。素朴なやり方であるが、その煙は何らかの力を持つことを信じて、身体が健康であるようという願いを込めてやっているに違いない。3 位を占めるのは洗い観音(写真 3, 4)で、江戸時代最大の火事であった「明暦の大火」で、当寺の檀信徒の一人「屋根屋喜平次」が妻を亡くし、その供養のため、「聖観世音菩薩」を高岩寺に寄進したものとされる<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> 権田保之助「民間信仰」『娯楽業者の群』(文和書房、1974) 167-168 頁; 圭室文雄「「延命地藏印行利益記」について」『明治大学教養論集 243 号』(明治大学教養論集刊行会、1992) 141 - 163 頁; 同上「とげぬき地藏と治病」日本風俗史学会編『風俗史学 9 号』(日本風俗史学会、1999) 14 - 18 頁を参照。

<sup>3</sup> 来馬規雄編『高岩寺誌』(高岩寺、1986) 32 頁を参照。

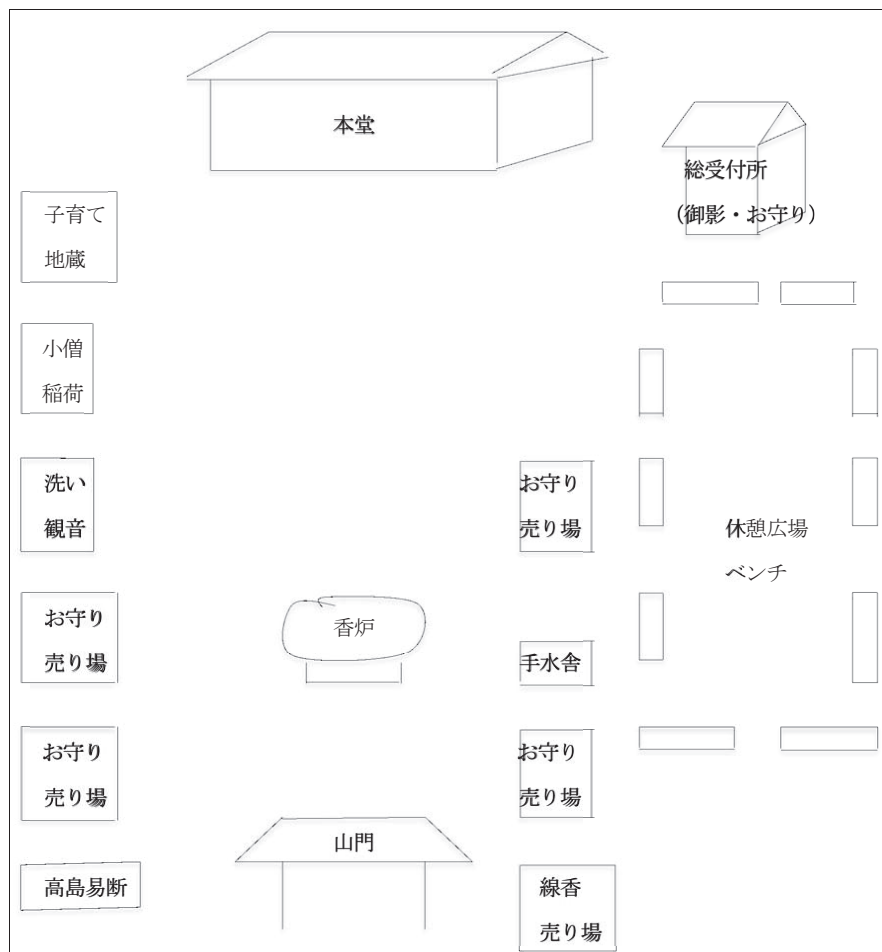


図1 高岩寺境内略図（筆者作成）

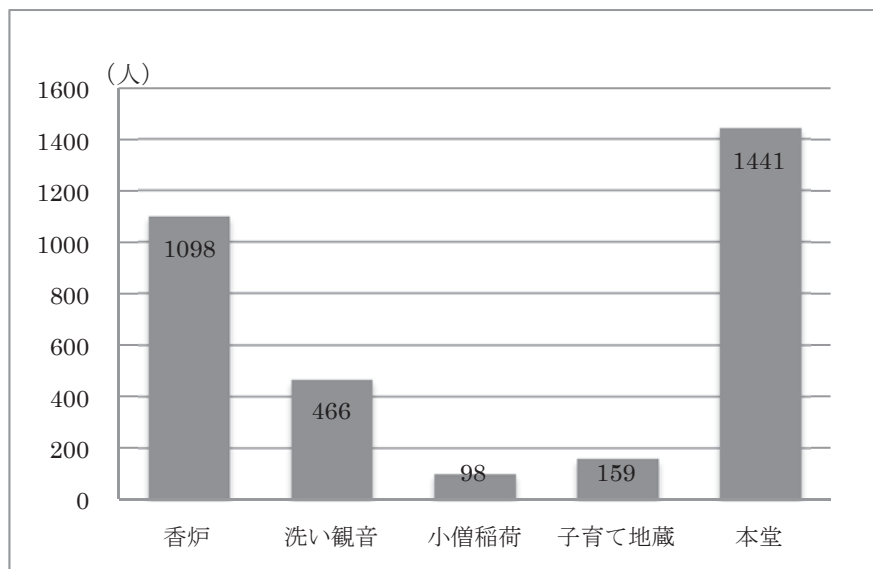


図2 境内各所における参詣人数<sup>4</sup>(2016年11月23日(水・祝)午前10時から12時まで)

病気など治したい部分を洗うと効き目があると言われ、さらに、とげぬき地蔵は秘仏であるため、かわりに、洗い観音がその役割を果たすという説もあるほど人気の高い信仰対象である。縁日になると、長い行列ができ、列の先頭では数人の老女が柄杓で黒々とした観音に水をかけ、持参したタオルで拭いている賑やかな風景が見られる。ただ、あまりにも混む時は並ぶ時間が長いため、特に地元の人には逆に縁日を避けてお参りするケースもある。また、子育て地蔵には、隣の露店で買った団子が供えられていることもよく見られる(写真5)。人によって多少違いはあるが、主な参詣パターンは以下の3つの流れに順じたものであるとみられる。

- ①山門→香炉→本堂→山門
- ②山門→香炉→本堂→洗い観音→山門
- ③山門→香炉→洗い観音→本堂→山門

つまり、高岩寺においては、昔から霊言あらたかなことでよく知られている

<sup>4</sup> 同一人が複数の所に行くことがあるため、重複にカウントされたことが考えられる。



写真1 「高岩寺」山門前  
(2016年5月24日筆者撮影)



写真2 香炉の前に煙を煽る参詣者たち  
(2016年8月24日筆者撮影)



写真3 洗い観音の前に並ぶ参詣者たち  
(2016年5月24日筆者撮影)



写真4 洗い観音  
(2016年8月24日筆者撮影)



写真5 子育て地蔵の前に供えられている焼き団子  
(2016年11月24日筆者撮影)

本尊のとげぬき地蔵を中心に、いくつかの信仰対象が共存し、とげぬき地蔵のご利益だけのために来る参詣者もいれば、とげぬき地蔵だけではなく、洗い観音、あるいは小僧稲荷や子育て地蔵と一緒に拜んでいく参詣者もいるという信仰空間が形成されているのである。

### 3 高岩寺（とげぬき地蔵）に集う参詣者

冒頭で述べたように、高岩寺では1月、5月、9月の24日に、年に3回、一日2回約2時間に亘る大祭が行われる。筆者もその大祭に参加し、20人の参詣者に対して半構造的インタビューを実施し、その身上情報、参詣動機や行動様式などについて考察を行なった。



写真6 天徳院住職による法話  
(2016年5月24日筆者撮影)



写真7 高岩寺僧侶による読経  
(2016年5月24日筆者撮影)



写真8 「大般若転読会」①  
(2016年5月24日筆者撮影)



写真9 「大般若転読会」②  
(2016年5月24日筆者撮影)





写真 10 住職らが読経しながらの本堂めぐり  
(その一) (2016 年 5 月 24 日筆者撮影)



写真 11 その二  
(2016 年 5 月 24 日筆者撮影)

午前 10 時半ごろ、各地からの参詣者で埋まる本堂で、「天徳院」の住職である大藪正哉による法話で法要が始まる。始まる前に、一人ひとりに大藪氏執筆の小冊子が配られ、そこに法話の内容が載せられている。筆者が参加した 2 回の法話は、「あわてなければ心さわやか」と「いつでも どこでも ありがとう」というテーマで、各回約 30 分展開されていた。法話の最後には、「みんな心の中に居る」<sup>5</sup>という歌を参列者全員で合唱するのである。筆者のような初めての参列者はそれについて歌うのが難しいが、多くの参列者は慣れている様子で住職と一緒に歌い、荘厳でありながらも明るく和やかな雰囲気となっている。法話が終わるところ、菊の花びらが参列者に配られる。身体健康や息災などご利益があると言われ、その場で食べてもいいし、持ち帰ってもいいとされている。法話の次は「大般若転読会」が行われ、30 余人の僧侶による大般若経六百巻の転読<sup>6</sup>が始まり、経巻を右または左に傾けながら本文の紙をばらばらと落とすようにして大声で読み上げる非常に圧倒される風景である。その際、持参した經典を取り出して一緒に読誦する参詣者の姿も見られる。それに、転読の勢いで起こる風を受けようと前に坐っていた参詣者たちはもとより、後ろ

<sup>5</sup> 「心静かに 心を見れば (お空の星も ご先祖様も / この世の人も あの世の人も / 見えているものも 見えないものも / どんな思いも 思うすべては) / みんな 心の中に 居る / みんな 居る居る 心の中に / いつでも 居ます 心の中に / どこでも 居ます 心の中に / みんな 心の中に 居る / お陰さます 心さわやか / みんな楽しく生きようよ」 (当日配られた冊子により) という内容である。

の参詣者までが中腰になって両手を差し出す。それだけではなく、住職らが読経しながらの本堂巡りの時も、持参した手ぬぐいや財布など自分の身の回り品をその法衣や数珠に女性たちが懸命に触れようとする姿が非常に印象深かったのである。風であれ、法衣や数珠であれ、あたると「無病息災」というご利益があると信じているからそのような行動を行ったのであろう。経典にそういったや利益は書かれていないが、転読で起こった風であれ、住職の法衣や数珠であれ、あたると「無病息災」のご利益があるという共通の信仰に基づいて、いつの間にか定型のように行われるようになったのではないかと推測できる。最後に、参列者が線香をご本尊のとげぬき地蔵に上げる儀式をもって午前の大祭が終わりとなる。

では、どのような人が、なぜここを訪れるか、ここで何をするかといった問いを明らかにするため、以下の具体的な事例を通して、分析を加えてみた。

### 事例1

年金生活をしている一人暮らしの女性で、3,40年間仕事でアメリカに滞在し、今年の6月に日本に帰ってきたところである。岐阜出身である彼女は、現在東京の西巢鴨、地蔵通りまで自転車で5分ぐらいのところに居住している。それまでは、とげぬき地蔵のことを知らなかったという彼女は、帰国してまだ東京で住まいが見つからなかった時、とげぬき地蔵通りの近くのホテルにしばらく泊まっていた。そこで、ホテルの従業員にとげぬき地蔵を紹介され、知ったという。以来、ほぼ毎日一人でここに通うようになって、地蔵通りをぶらぶら歩いて、とげぬき地蔵にお参りして家に帰るということである。「洗い観音」に関しては、混雑する時が多いから、「月に2、3回ぐらい」持参したタオルで観音様の身体を拭いてお参りするという。(2016年9月11日のインタビューによる)

---

<sup>6</sup> 「転読」については、『仏教辞典』によれば、「最初から最後まで読む〈真読〉」に対して、経題と経の一部分だけを読んで全巻の読誦に代えること。国家安泰・五穀豊穰・病氣平癒などを祈って大般若経600巻などを読誦することは、日本ではすでに奈良時代から行われていたが、次第に儀礼化した略読が主となり、折本を空中で翻転する華やかな形式となった[中村ほか編,1989:597]と記されている。また、「この儀式を転経会または転読会と称し」[中村,1975:989]と述べられている。

## 事例 2

板橋に娘と孫と三世代同居をしている 75 歳の女性。彼女はほぼ毎月 4 の日は来ているということで、子どもの頃からずっと通っていて、もう 70 年もの歳月が経ったということである。「物産店とかいろいろあるから、そういうの、買い物だったり、お地藏様にお参りして、それだけですけど。たまにあっちやるけど」、「お祈りは特に（しなくて）、気持ち的にね、」と自分の参詣コースを話している。「あっち」というのは、「洗い観音」のことであるが、「洗い観音様」は混雑する時が多いから、「たまにやる」ことになっているのであろう。（2016 年 9 月 24 日のインタビューによる）

## 事例 3

北区に住む 64 歳の女性。弟と猫一匹と一緒に暮らしている彼女は、いつも一人でお参りにくるということで、この日も一人で来た。初めてお参りに来た時から、もう 30 年以上の年月が経ったという彼女は、実にここと縁が深い一人である。「母が、子どもがなかなかできなくて、ここにお参りしたら、わたしが授かったの。それで生まれたのが 24 日なの、わたし。そう、7 月の 24 日のここの地藏盆って、やっぱりこうあるよね。その日にわたしが生まれたの。それで母が亡くなったのは 12 月の 24 日で、やっぱり 24 日。だから、そういう人って、前ここでね、会った人とそういうお話をしたら、そういう人はやっぱりここに、あの、縁が深いんだから、ちゃんと毎月お参りに来たほうがいいわよって言われたの」と「とげぬき地藏尊」から授かった御利益話をしている。「それで、会社にお勤めしてる時は、毎月 24 日は来てたんですけど、忙しくなって、仕事が忙しくなって、来なかったのね」。でも、10 年前に会社をやめてからまた通い始め、一人でお参りして商店街をずっと歩いて都電に乗って帰るという彼女の参詣コースであるが、「ここでお友達に会ってね、4 の日になると、待ち合わせをして、ここに来てお昼を食べて、でまた 4 の日に会いましょうねって別れていくおばあちゃんもいるみたい。ああ、そういうお参りの仕方もあるんだ。前、こう後ろからこっそりお話を聞いてたのね」と話す。（2016 年 9 月 24 日のインタビューによる）

## 事例 4

埼玉県所沢市から訪ねてきた 70 歳の女性。1 月、5 月、9 月の 24 日、大祭

の日は欠かさず必ずお参りするという彼女は、もう10年以上前からずっと通っている。前は友達と一緒に来ることが多かったが、今回は一人でお参りに来た。下の病気になって、来月に手術を受けるということで、それで一人でこっそりお参りに来たのである。その日、朝8時半ごろ家を出て、9時半頃に巢鴨に到着。まず、「洗い観音様」に水をかけて、持参してきたタオルで拭いて、本堂にて大祭に参加して、お地藏様に手術が無事に終り、下の病気の快復を祈り、お札を頂いた。大祭が終わった後、商店街をぶらぶらして、「猿田彦大神の庚申塚」にもお参りして帰るというコースである。(2016年9月24日のインタビューによる)

#### 事例5

埼玉県さいたま市浦和区に住む80歳の女性。今から4、5年前、主人が亡くなった後、初めてお参りに来た。いつもは友人と一緒に来るが、今回は一人でお参りに来た。というのは、先日、体調が気になって、お医者さんのところに行ったら、最初は「できもの」といわれ、あまり気にしていなかったが、その後、また市立病院に行ったら、実はガンだと宣告された。「とてもこわくて、あと10年は大丈夫だとお医者さんは言っているが」、「息子はいるけど、別々の生活があつてさ、ね、だから、息子にも言えないし、兄弟にも言えないのよ」。「家に一人でいても、こわくて、それで、お参りに来た」ともう少しすると泣きそうな感じで話している。それでも、一応、息子さんには「生命保険はどこのを買っている」とか、「自分の印鑑はどこにある」とかを教えているようである。そんな話をしているところ、隣に座っているお婆ちゃんが「実は自分もこの前、心臓の手術を受けたの、一人で家にいてもしょうがないから、こんなところに来てね、お話をして、、、」と慰めの言葉をかけてきて、二人でまたいろいろ会話を交わす。(2016年9月24日のインタビューによる)

#### 事例6

埼玉県所沢市から初めてお参りに来た53歳の女性である。還暦を迎える友達のために、「ここの赤いパンツを求めに来た」ということであった。「還暦の人に赤いパンツを送ると、御利益があるということで、無病息災とかね」と話して、「還暦のお祝いでお札をいただき、わたしはついでに御朱印をいただく」と満面の笑みを浮かべ、非常に明るい人であった。(2016年9月24日のイン

タビューによる)

#### 事例 7

栃木から訪ねてきた 87 歳の男性。前にも何回来たことがあるという彼は、この日は、地元の人と一緒に、貸し切りバス 2 台で 60 人の団体でいわゆる「日帰り旅行」でやってきた。朝 10 時頃東京に着き、浅草寺から、お台場とかを回って、最後がここ巣鴨というルートであった。大祭に参加して、御本尊をお参りして帰途につくということである。(2016 年 9 月 24 日のインタビューによる)

#### 事例 8

埼玉の西武から来た 84 歳の一人暮らしの女性。2、30 年前から、毎月 4 の日は欠かさず、ずっと通っている彼女は、いつも一人でお参りに来るという。友達と一緒に来るのもいいけど、ただ一人の場合は、それぞれの日程を調整し合わせなくてもいい、随時に来られるし、楽だから、一人で来るのが好きというわけだと言う。特に信仰しているわけではないが、「年を取ると、だんだん身体も弱くなっていくので、元気ね、元気をいただくためにお参りに来ている」と強調している。今は体調があまりよくないため、「洗い観音様」にお許しをいただいて、年に何回しかお参りしていないが、昔は、ここに来るたびに観音様に手を合わせ、水をかけてタオルで拭いたという。(2016 年 9 月 24 日のインタビューによる)

以上の事例からみると、地元の巣鴨周辺をはじめ、東京都内および関東一円各地から参詣者が訪れ、しかも常連の参詣者がほとんどである。ほぼ毎日通う人もいれば、毎月 4 の日、すなわち縁日に、あるいは大祭の日である 1 月 24 日、5 月 24 日、9 月 24 日に来る人もいる。一人で参詣するパターンもあれば、知り合いや家族と一緒に参詣するパターンも見られる。

さらに、病気治しなど具体的なお利益を求めて参詣するケースもあれば、特に何かの具体的なお利益のためではなく、一人で買い物をしたり、商店街をぶらぶらしたり、あるいは友達に会い一緒に食事をしたりおしゃべりをしたりして、家では求められない満足感や元気、あるいは安らぎを得て余暇を過ごすため参詣に訪れるケースもある。また、ここのとげぬき地蔵尊と縁が深く、特別なつながりをもつと篤く信じて参詣する信心深い参詣者もいる。その他、旅

行・観光など様々な動機をもって高岩寺に参詣するわけである。

#### 4 巢鴨地藏通り商店街

お参りを終えた人たち、とりわけ高齢の女性たちは、仲間たちと食事をしたり、買い物をしたりのんびりと地藏通商店街を楽しんでから帰宅するパターンが多い。ここには、健康食品や漢方薬、都心の高級デパートでは絶対売っていないような千円均一の洋服やだぶだぶの肌着、団子やせんべいなどを売る店が軒を連ねている。それに縁日になると、ぎっしりと並ぶ古風な露店、さらに、店員もおばあさんたちとゆっくり楽しく会話をしながら対応しているなど、何もかも高齢者思いで、お年寄りにとっては心があたたまるといえる懐かしい情景であろう。

JR 山手線巢鴨駅を出て白山通りを渡り、西側の商店街を北へ約 150 メートル進み、白山通りから分かれ、巢鴨地藏通商店街の大きな立て看板が目に入る。巢鴨地藏通り商店街は長さおよそ 800 メートルにわたる商店街で、加盟している店舗数は約 180 店舗である。さ

表 1 商店街の加盟店の品物種類  
（「巢鴨地藏通り商店街マップ」より筆者作成）

品物		店舗数	%
衣料品・生地・古着等		33	18.0
(内訳)	婦人服	18	
	紳士服	2	
	肌着類	5	
	その他	8	
レストラン・喫茶店等食事処		31	16.9
食料品・食材		19	10.0
雑貨・生活小物（カバン、アクセサリ、傘、帽子、印鑑、メガネ、時計等）		18	9.8
和菓子・甘味処		14	7.7
薬局		9	4.9
(内訳)	漢方薬	3	
	一般薬局	6	
美容、化粧品、ネイルサロン等		8	4.4
スーパー・コンビニ・青果		7	3.8
靴		6	3.3
インテリア（家具、カーテン、寝具等）		5	2.7
医療や健康用品（杖、シルバーカー、車椅子、家庭用医療器、補聴器、磁気治療器等）		4	2.2
酵素風呂・足湯等		3	1.6
仏具		2	1.1
介護・保険・老人ホーム相談		2	1.1
病院・診療所		2	1.1
終活協議会		1	0.5
その他		17	9.3

らに、「とげぬき地蔵尊」の縁日である毎月4の日になると、道路の片側に百何軒の露店が立ち並び、結構な賑わいを見せるのである。その全盛期といわれる昭和62(1987)年前後から平成10(1998)年にかけて、縁日には少なくとも一日4万人以上の人出があり、さらに正月、5月、9月の24日、すなわち「とげぬき地蔵尊」の大祭となると、一日6万から8万もの人が訪れ、年間参詣客の数は800万人とされていると巣鴨地蔵通り商店街

振興組合理事長である木崎茂雄が述べている<sup>7</sup>。今でも、縁日には一日数万人もの善男善女で賑わい、一年を通して参詣者が絶えずに訪れる。中でも、杖をついたり車椅子で来るお年寄りの姿も目にする。では、その商店街のいったい何人が人々、とりわけ高齢者たちを引きつけるかを探るために、加盟店と露店と両方をみながら、分析を行なっていきたい。

筆者が調査を行った当日(2016年12月24日)の時点で、商店街に加盟している店舗は183店で、出店していた露店は105店で、実に多種多様な商品が売られている(図4)。その商品の中身をみると(表3と表4)、食料品と衣料品と雑貨・生活小物の3種類が上位を占めており、やはり高齢者向けのものが多いのが特徴である。和菓子、佃煮、漢方薬をはじめ和風構えの店がやや多く、商品の名前も目を引くものである。例えば、「長寿堂」せんべい屋、靴屋は「健康靴」を履いて「歩いて健康」と客を引き寄せている。他にも、「健康こだわり食品」、「長寿のり」、「甘露七福神」、「地蔵せんべい」など名前にもいろいろな工夫が凝らされていることがわかる。さらに、シルバーカーや杖、車椅子とか、介護、老人ホームや保険の相談とか、終活までまさに老後生活の全般を考え展開されている。

表2 露店の品物種類(筆者作成)

売り物	軒数	%
食料品・食材	33	31
衣料品等	19	18
雑貨・生活小物	19	18
化粧品・アクセサリ・カバン・帽子等	12	11
和菓子・甘味処	7	7
甘酒	3	3
占い	2	2
健康食品	2	2
靴	2	2
その他	6	6
合計	105	100

<sup>7</sup> 木崎茂雄『ぶらり、ゆったり、今こそ癒しの街・巣鴨』(展望社、2014)42頁を参照。





写真 12 「健康こだわり食品」  
(2016 年 5 月 24 日筆者撮影)



写真 13 「長寿のり」  
(2016 年 5 月 24 日筆者撮影)

その中、特に目立つのがいわゆる「赤パンツ」などの下着類である。実はここ巢鴨は赤パンツでも有名であり、毎月の2日が「マルジの日」と定められるほど、赤パンツの元祖と言われる「マルジ」という人気の赤パンツの専門店がある。他にも、赤パンツを売っている店があり、「赤の魔法 開運赤パン 赤色のエネルギーを身につけ、身体も運氣もパワーアップ 赤のパワー」という看板を出して客を引き寄せている(写真 14)。事例の中にもあったように、わざわざここに赤パンツを求めに訪ねる参詣者もいるほど実に人気の高い品物である。

ちなみに、なぜ赤がパワーをもたらす強い色だとされるかという点、「赤」の文字構成は「大」と「火」の組み合わせになり、大火は大日、すなわち太陽を象った文字で、光明と熱をもたらすカラーイメージが付けられている。それに、古代から赤は生命の源である血と、光・熱の源である日や火に見るところの神聖にして不可思議な力をもつ色であると信じられ、このような神聖な赤で悪魔を祓い、その襲撃から身を守るとされる<sup>8</sup>。一方で、赤い着衣は体温保持や眼病予防に効果があるとして実利面から用いられる例も少なくなく見られる<sup>9</sup>。このように、赤は病気や災厄の難から逃れられるといった「招福除災」のシンボルカラーとなったのではないかと考えられる。

<sup>8</sup> 長崎盛輝『色・彩飾の日本史』(1990、淡交社) 40, 58 - 59 頁を参照。

<sup>9</sup> 藤井尚子『赤の力学—色をめぐる人間と自然と社会の構造—』(風間書房、2015) 73 頁を参照。





## 加盟店

雷神堂菓嶋本店（煎餅）  
 奈田利亭地蔵店（菓膳にんにく）  
 山和証券  
 DEARS（ダーツバー）／プロフェッショナルメディック（運営・派遣）  
 ブルメリア（喫茶）／サン・まつみや東店（婦人服）  
 岡塾栄支店（和菓子）  
 司生堂（漢方薬）  
 元祖塩大福みずの  
 海鮮三崎港（回転寿司）  
 マルヨシ（ダンス洋服品）  
 参拝茶山年園（お茶）  
 フアミリーマート  
 杉養蜂園（蜂蜜）  
 ハツ目やにしむら（蒲焼）  
 地蔵煎餅むしや  
 地蔵そば大橋屋  
 甘露七福神（甘味処）  
 鶴すし／越後屋洋装部  
 モモコーボレーション（杖・シルバーカー・車いす）  
 ことぶきインテリア  
 たけやま（食事、喫茶）  
 セフインレフン  
 おいもやさん興師菓嶋店（いも菓子専門店）  
 すずむら（ブティック）  
 矢崎海苔店  
 有機庵（すっぽん・高麗人参）／まる天（練り物）  
 メリイ（カバン）  
 オシヤレがしMakoto（婦人服）  
 オリエスドラッグ  
 円満屋（雑貨）  
 近江の館（健康・自然食品）  
 Wショップチェーン（靴）  
 かねたや菓嶋店（家具）  
 澤海商店（作業服）  
 マルジ3号店（紳士服）  
 マルジ4号店（赤パンツ館）

J R 菓嶋駅方面→

## 商店街

## 露店

味噌漬け  
 落花生  
 玉こんにやく  
 乾物  
 キュービおもちゃ  
 財布  
 大判焼き  
 わらび餅  
 ぶつかけチョコ  
 ペビーカーステラ  
 カツラ  
 赤パンサー・肌着  
 アクセサリー  
 手相占い  
 靴下  
 カレンダー  
 タワシ  
 アクセサリー・化粧品  
 チキンステーキ  
 佃煮  
 わらび餅  
 果物&野菜  
 じゃがバター  
 スキンケア  
 ぶつかけチョコ  
 服のボタン・雑貨  
 お好み焼き  
 たくわん  
 黒糖  
 化粧品  
 帽子  
 えびせん  
 乾物  
 易断  
 大判焼き  
 甘酒  
 カパン  
 玉こんにやく  
 生活小物・雑貨  
 お好み焼き  
 漬物  
 七味唐辛子  
 落花生  
 ペビーカーステラ  
 漬物  
 焼きそば  
 乾物  
 鈴木屋（履物）  
 萬盛堂薬局六地蔵店  
 塩大福伊勢屋菓子店  
 スカイ（喫茶）  
 その近江（呉服）  
 河村屋（履物）  
 大坂屋プラザ（婦人服）  
 三好屋（衣料品）／クリップジョイント美容室  
 東京すがも園（開運塩大福）  
 島屋メリヤス（肌着）  
 長寿堂（煎餅）  
 月岡商店（催事）  
 タカセ（ハン・ケージ・喫茶）  
 サン・まつみや本店（婦人服）  
 創作ちりめん・布達舎（小物・雑貨）  
 萬盛堂薬局分店／山下理髮店  
 ジャパンライフ（寝具・電気治療器）  
 松屋（袋物・カバン）  
 木美屋（婦人服）  
 コバヤシ洋傘店（傘・帽子・雑貨）  
 笹屋（漢方薬）  
 桜膳（焼肉・韓国料理）  
 ワンダーネスト（広告企画制作）  
 関根商店（燃料・石油）  
 佃煮（佃煮）  
 アルブスシェーズ  
 地蔵もなか松月堂（和菓子）  
 磯田園（お茶）  
 サンワ靴店  
 金太郎（館）／想いこーボレーション（終活協議会）  
 永楽堂（仏具）  
 喜福堂（パン）  
 タムラ（帽子）  
 伊藤佛具店  
 F.O.B. KOBÉ（1000円ショップ）  
 京佃煮野村  
 魚卵（鮮魚・弁当）  
 アルブスカフェ  
 ふれんど（婦人服）  
 萬盛堂薬局本店  
 ひさこ屋食物店  
 石崎工務店  
 マーキュリー（婦人服）  
 菓嶋で北海道（北海道産）  
 モード牡丹（婦人服）  
 築地やまの（小魚専門店）  
 ときわ食堂  
 石栄堂印刷  
 鈴木屋（履物）

## 加盟店

さらにいうと、下着類の商品が加盟店でも露店でも並んでいるのは、高齢者の老後の心配事の一つでもある「シモの世話」と関連があるのではないかと考えられる。実際、JR 巢鴨駅の方面から巣鴨とげぬき地蔵商店街に入るところに、「すがもんのおしり」（写真 15）という商店街のキャラクターである「すがもん」のお尻とされる大きなオブジェがある。その隣に「おしりさわれば、結ばれる。やさしくさわれば、世話いらず」という文字が書かれている。つまり、高齢化率が進む中、一人暮らしの高齢者、あるいは高齢夫婦も大幅増加し、家族にシモの世話を受けたくないし、世話をしてくれる人もいないから、シモの世話にならないように、赤パンツを購入するという素朴な考え方も推測できよう。



写真 14 赤パンツ店  
(2016 年 5 月 24 日筆者撮影)



写真 15 「すがもんのおしり」  
(2016 年 5 月 24 日筆者撮影)

また、興味深いことに、筆者が調査を行なった当日（2016 年 12 月 24 日）に、「手相」と「易断」という占い関係の露店も 2 軒があり、実際、高岩寺の境内にも「高島易断」という露店がある。要するに、高岩寺（とげぬき地蔵）は曹洞宗のお寺ではあるが、ここ巣鴨地蔵通り全体としては特定の宗教、宗派の色はなく、参詣者個々のニーズに応じて求められる規制力が緩やかな信仰空間となっているのではないかと考えられる。

## おわりに

高岩寺においては、気軽に本堂の中に入って休憩を取ったり、友達とおしゃべりしたりするお年寄りたちが見られる一方、本尊のとげぬき地蔵さまに向

かって、手を合わせて読経する真剣な姿も見られる。参詣者に対する規制力が緩やかなわりに、霊験あらたかなる御利益のあるとげぬき地蔵が信仰心を後押ししている。その上、本稿には触れていないが、「とげぬき生活館相談所」という場も境内に設けられ、心の悩みや法律、宗教などあらゆる悩み事について専門家によって無料で相談が行われる。高齢者および「準高齢者」にとっては「総合的心の拠り所」と言えよう。

また、高級デパートのような売り場にはない、しかも安く求められる塩大福、漬物、健康食品、漢方薬など年配者が好みそうな専門店や食堂が立ち並び、高齢者たちの天国とも言えるこの商店街は余暇を過ごすためのレジャーの場ともなり、信仰の面においても日常生活の面においても何でも求められる「老後生活の百貨店」ではないかと考えられる。

## 参考（引用）文献

- 川添登、1986、『植木の里』、ドメス出版  
 川添登編、1989、『おばあちゃん原宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』、平凡社  
 菊岡沾涼、1735、『続江戸砂子温故名跡志卷之四』  
 木崎茂雄、2014、『ぶらり、ゆったり、今こそ癒しの街・巣鴨——とげぬき地蔵通り商店街の新たな挑戦』、展望社  
 北豊島郡農会、1918、『北豊島郡誌』、北豊島郡農会  
 倉沢進編、1993、『大都市高齢者と盛り場——とげぬき地蔵をつくる人びと』、日本評論社  
 来馬規雄編、2000、『高岩寺誌』、高岩寺  
 権田保之助、1974、『権田保之助著作集 第二巻—娯楽業者の群』、文和書房  
 圭室文雄、1992、「「延命地蔵印行利益記」について」『明治大学教養論集』243、明治大学教養論集刊行会  
 同上、1999、「とげぬき地蔵と治病」日本風俗史学会編『風俗史学』9、日本風俗史学会  
 長崎盛輝、1990、『色・彩飾の日本史』、淡交社  
 中村元、1975、『佛教語大辞典 下巻』、東京書籍  
 中村元ほか編、1989、『仏教辞典』、岩波書店  
 藤井尚子、2015、『赤の力学』、風間書房

## 参考サイト

巣鴨地蔵通り商店街ホームページ：

[http://www.sugamo.or.jp/downloads/pdf/sugamomap\\_161001.pdf](http://www.sugamo.or.jp/downloads/pdf/sugamomap_161001.pdf)

**謝辞**

調査にあたっては、高岩寺関係者の皆様及び大森邦子様をはじめとするとげ抜き生活館相談所の皆様にご協力いただいた。この場を借りて深甚なる感謝の意を表したい。

## **The elderly gathering at the Togenuki Jizo-Dori St. in Sugamo**

**Tian CHEN**

Sugamo Station of JR Yamanote Line is extremely crowded on the 4th, 14th and 24th of every month, and most of them are the elderly. They are heading for the famous Jizo named Togenuki of Koganji Temple and also for the shopping street there. It should be very rare in Tokyo where is a so modern and fashionable city. On the other side, it also reveals what a super aged-society in Japan now.

In this paper, I interviewed 20 persons to investigate what kind of the place is, what the visitors, especially elderly people seek for here, and how they move here. All in all, the purpose of the paper is to reveal why the Togenuki Jizo-Dori St. in Sugamo attracts so many elderly people. Furthermore, this research is considered as a clue about the problem of how the elderly live in the super aged-society while keeping eyes on the death.